教育・保育目標	心身ともに健やかでいきいきと生活する子どもの育成
重点目標	・基本的な生活習慣を身につけ、いきいきとした心身の健康づくりに取り組む。 ・共に生きていく中で、互いのよさや違いを認め合い、人の役に立つことに喜びを感じることの出来る集団作りを推進する。 ・自分で気づき、考え、行動しようとする力を育てる子ども主体の教育・保育を実践する。 ・心弾む体験を重ねることで、豊かな感性を育み、自分なりに言葉（態度）で表現する教育・保育を実践する。 ・地域、家庭、こども園の連携を深め、保護者と子ども、職員と地域とが育ち合うコミュニケーション作りを推進する。 ・幼保連携型のこども園として、新しい教育・保育の実践・発信を行う。

項目		重点項目	具体的施策	達成目標		成果と課題	改善策	学校関係者評価
学力の向上	子どもの実態に応じた教育課程の編成	・子ども達の実態に応じた教育・保育課程を編成し、実践する。	・子どもの実態を教育・保育課程に反映させていけるよう、定期的な振り返りを行う。	・５月、６月、９月、１月の職員会議の中に教育・保育課程見直しのための時間を設ける。 ・１歳児の３期４期の見直しを行う。	A	・コロナ禍の為、目標に掲げた月での話し合いが難しい月もあった。しかし定期的には見直しの為の時間を意識して持つことができた。 ・前年度の課題であった１歳児の３期４期の見直しが行うことができた。 ・教育課程の引継ぎを要する事項が増加し、その伝達が課題である。	・５月・６月・９月・１月に話し合う機会をもち、教育課程を見直す。 ・教育課程の引継ぎを要する事項については別紙で表を作り共通理解を図る。	・子どもの姿を捉え、教育・保育課程の充実を図られたい。
	職員の資質向上	・公開保育や園内研修会を計画的に実施し、全職員で学び合う。 ・具体的な子どもの姿をとらえるために研修方法を工夫し、保育者の子ども理解を深める。	・園内研修会を実施し、子どもの主体性を育む保育について学び合う。 ・幼保連携型認定こども園教育・保育要領を踏まえ、子どもの主体性を育む保育環境等を職員間で話し合いを重ね、工夫していく。 ・本園ならではの保育環境を活かし、好きな遊びを存分に楽しんだり異年齢で刺激を受け合ったりできるような教育・保育内容を工夫していく。	・『子どもの主体性を育む保育について。』職員会議や園内研修、初任研など保育者同士で学び合う機会を持つ。また、講師を招聘した園内研修を年１回実施する。 ・クラスの枠を越えた子どもの姿の共有や環境の再構成についての話し合いを、「資質・能力の３つの柱」「１０の姿」「５領域」に観点を置いて、月２回以上行う。さらに、年３回テーマをもって保育反省を行う。 ・保護者アンケートにおいて「子どもはこども園に行くことを楽しみにしている。」、「こども園は子どもが活動する中で心弾ませられるような環境を整えている。」と回答した人の割合が９５％以上になる。	B	・講師を招聘した園内研修を年２回実施することができ有意義な時間となった。また子どもの主体性とは何なのか職員間で考えるきっかけとなった。 ・子どもの姿を共有する機会が持てるように週１回の話し合いや環境の再構成に取り組むことができた。しかし幼児クラスでは年３回テーマをもって保育反省を行うことはできなかった。 ・アンケートでは「こども園は子どもが活動する中で心弾ませられるような環境を整えている。」が９６％であり教育・保育の意図が保護者に伝わっていると感じる肯定的な回答があった。しかし、「子どもはこども園に行くことを楽しみにしている。」が９２．８％と低くなっている。子どもが園での出来事をどのように伝えているかの違いがあると推察される。子ども自身が保護者に伝えたいと思える教育・保育活動を増やしたい。	・今後も講師を招聘した園内研修を通して職員の資質向上を図り学びを教育保育にの充実につなげていく。 ・“主体性とは何か”という観点で行事のあり方について話し合った。来年度は年度当初に話し合いのテーマや日程を具体的に考えて今一度職員の資質向上や共通理解につながる話し合いの機会や方法を見直していきたい。 ・肯定的な意見（A評）が増えるように園で心弾ませる姿という事実の伝え方を工夫していく。	・幼保連携型認定こども園教育・保育要領を踏まえ、園内園外研修での学びをいかし、時代に即した教育・保育を進められたい。 ・子どもの主体性、対話的で深い学びと、非認知能力など、幼児期の学びと小学校教育の学びの接続を図られたい。
豊かな心・健やかな体の育成及び健全な食生活の推進	健全な基本的生活習慣の推進	・子どもに基本的な生活習慣が身につくようにし、心身の健康づくりを進める。 ・食べる喜びを感じ、食への関心を深めていけるようにする。	・生活習慣を意識したり自らの健康や心身に関心を持ったりできるように、健康支援員による「ほけんの話」を取りいれる。 ・新しい生活様式に基づき、手洗いうがいや手指消毒を徹底、検温の励行、職員のマスク着用などを行う。 ・日々の給食や栽培活動、クッキングを通して、食材に興味を持ったり旬の食材を知ったり味わったりする。 ・家庭での話題に繋がるように栽培活動や子ども達に伝えた食の話を食育だよりやホームページを通じて知らせる。	・各年齢に応じた伝え方で、年間計画に基づき、月一回健康支援員による「ほけんの話」を行う。 ・「はやね・はやおき・あさごはん」が習慣づくよう、日々話をすると共に毎月の保健だより等で保護者啓発を行う。 ・食材への興味を深める為、旬の食材に関する掲示や献立の話を年５回以上する。また食育だよりやホームページを年６回以上発信し、保護者啓発も行う。 ・保護者アンケートにおいて「子どもが降園時や帰宅後に、園で栽培したものや給食に関する話をすることが増えたと感じる。」と回答した人の割合が８５％以上になる。	A	・各年齢に応じた伝え方で、健康支援員による「ほけんの話」を行った。その際、担任と健康支援員が事前に内容を話し合うことで共通理解をすることができた。また、この時期における生活様式に基づき手洗いうがいや、手指消毒についての話も行った。 ・「はやね・はやおき・あさごはん」が習慣づくように保健だより等で保護者啓発を行った。 ・食育だよりやホームページを通して年間で１４回発行した。 ・アンケート結果が８８％と目標を上回った。	・引き続き、日々の保育で基本的生活習慣の促進を図る。 ・保護者に園の取り組みの様子や、子どもの学び、保育者の意図がより深く伝わるように保健だよりや食育だよりの内容を工夫する。食育だよりでは、クッキングに焦点を当てた内容に偏らないように、給食の様子や栽培活動での取り組み、旬の食材についてなどの内容も充実させていく。	・「はやね・はやおき・あさごはん」といった基本的な生活習慣の確立と共に、挨拶をすることや交通ルールを守る大切さを知らせることを、保護者と共に取り組まれたい。
	豊かな心を育む道徳教育の推進	・共に生きていく中で、互いのよさや違いを認め合える仲間作りを推進する。 ・子どもの豊かな感性につながる教育・保育を推進する。	・「生きる力」の土台になる、子どもの自尊感情を高めるための保育者の関わりについて話し合い実践する。 ・園生活の中で子ども自身が自分の思いの伝え方について考えたり相手の思いに目を向ける機会を設ける。（主に５歳児） ・五感を通して季節を感じられるような環境構成や保育を実践する。	・年３回子どもの自尊感情を高めていくための保育者の関わりを意識しながら話し合いを行う。また乳幼児で年１回話合った内容を共有する機会を作る。 ・学年や棟で話し合いを月１回以上行い、子どもの成長や子ども同士の関わりを振り返る。 ・豊かな心を育めるよう、子ども同士の思いが行き違う際に納得するまたは折り合いをつけるまで話し合う機会を設ける。（主に５歳児） ・季節ごとに、四季を感じられるような自然物や掲示物を取り入れたり遊びを工夫したりする。 ・保護者アンケートにおいて「子どもは、こども園で自分を大切にすることや他の人への思いやりについて学んでいる。」と回答した人の割合が９０％以上になる。	B	・自尊感情を高めるための保育者の関わりについて話し合う機会を年３回持った。また乳幼児で話し合った内容を書面で共有した。 ・子どもの成長や関わりを振り返る話し合いの機会は月１回以上定期的に行うことができた。 ・思いが行き違う時には保育者が子ども達に寄り添うことで、子どもが自分の思いを伝えたり相手の思いに目を向けたりする機会を多く持つことができた。 ・５歳児は、子ども同士の思いが行き違い保育者に助けを求めてきた際、子ども同士でじっくり話し合える場を持ったり気持ちを丁寧に伝え合うようと投げかけたりすることで、気持ちに折り合いを付けるまで話し合う機会を持つことができ、自分達の力で解決しようとする力が育まれた。 ・四季を感じる自然物を取り入れ環境の再構成ができていた。 ・アンケートで９１．２％の肯定的な回答があった。	・引き続き自尊感情についての話し合いを６月・１０月・２月に行う。 ・引き続き乳児、幼児共に定期的に話し合いの機会を設けていく。 ・今後も保育者が子ども達に寄り添ったり話し合ったりする機会を持つ。 ・対話を通した保育をより行っていくことが課題である。 ・今後も四季を感じられるような環境構成や遊びを積極的に取り入れていく。	・こども一人一人の育ちや性格を把握しながら保育者が関わっていることが伺える。ケース検討や定期的な話し合いを継続されたい。 ・神津地区の四季を捉え、豊かな感性が育まれることを願う。
	体力の向上	・自ら進んで体を動かしたくなるような環境を工夫する。	・園庭や屋上園庭、遊戯室、プレイルーム、小学校校庭など様々な場を活用して子ども達が積極的に体を動かせるような機会を作る。	・幼児クラスでは園庭や屋上園庭、小学校校庭という場を利用して毎日５分でも子どもが集中して体を動かす機会を作る。乳児クラスは園内や戸外で子ども達が体を動かして遊べる環境を作り、しなやかな体づくりに繋げていく。	B	・保護者の方にもこのことが伝わっておりアンケートでは肯定的な意見が９８．８％であった。しかし、園外保育等で歩くと「しんどい。」「疲れた。」という声が聞かれた。	・今後も子どもの発達段階に応じた遊びや体を動かす環境をその都度見直して、子どもの体力の向上につなげていきたい。	・恵まれた園環境をいかし、引き続き活発な活動を展開してほしい。

	体力の向上		・園庭の固定遊具や縄跳び、ボール、フラフープなどを子どもの発達段階を踏まえながら効果的に活動に取り入れていく。また、遊戯室、プレイルームなど園内でもトランポリンやウェーブバランスなどの遊具を積極的に取り入れる。	・保護者アンケートにおいて「子どもが体を動かして遊ぶことが好きになったと感じる。」と回答した人の割合が９０％以上になる。 ・園庭の遊具の使い方や配置を、全職員で話し合う場を年間３回以上は持つ。		・学期ごとに園庭の道具の使い方や園庭の使用時間帯を乳児、幼児クラスで話し合ったことで職員の共通理解や子どもの発達段階に合った遊びの充実につながった。 ・遊戯室やプレイルームなども活用し雨など戸外に出られない日も室内で体を動かす遊びを積極的に取り入れた。 ・固定遊具やボール、フープ、縄跳び、タイヤなどを用いて様々な体の部位を運動させて遊ぶことができた。	・遊具の使用方法や子どもの発達段階に応じた遊びについては今後も職員間で話し合い共通理解を図っていきたい。	
開かれた・信頼される学校園づくりと評価の推進	学校園情報の積極的な発信	・発信する情報を、地域や保護者に伝わりやすいように工夫する。 ・保護者と子どもの姿の共通理解をはかり、連携を深める。	・幼保連携型認定こども園教育・保育要領に基づく園の教育・保育の可視化を図る。 ・園での遊びにおける子どもの成長や学び、保育者の願いなどをクラスだよりやホームページなどで可視化して発信する。	・保護者やこども園に携わる地域の方にもこども園の教育・保育に関心を持ってもらえるよう、園の様子等を毎日ホームページに掲載する。また園の様子を様々な角度から伝えるために、ホームページの更新を各クラスの担任や担任以外の職員が交代で行う。 ・遊びの過程や子どもの学びを、幼保連携型認定こども園教育・保育要領にある『幼児教育において育みたい資質・能力』『幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿』『５領域』の観点で読み取り、クラスだよりや連絡ノートなどを用いて年３回以上発行する。 ・保護者アンケートにおいて「こども園はクラスだよりや棟だより、ホームページ等を通して、子どもが普段遊んでいる様子や行事の様子を保護者に積極的に伝えている。」と回答した人の割合が９５％以上になる。	A	・お盆休みや年末年始などを除き、毎日各クラス担任や職員室の職員が交代でホームページを更新した。作成する時間の確保が引き続き課題となる。 ・遊びの過程や子どもの学びを乳児は毎月の写真の読み取りを用いて年９回、幼児はクラスだよりを用いて年に４回発行した。また、幼児は行事等で遊びの過程を動画で保護者に伝えた。コロナ禍により予定していた行事が急に中止や内容の変更を余儀なくされるものがあったが、その中でも動画やクラスだよりなどで普段の遊びの様子も伝える機会をもった。 ・保護者アンケートにおいて、「こども園はクラスだよりや棟だより、ホームページ等を通して、子どもが普段遊んでいる様子や行事の様子を保護者に積極的に伝えている。」と回答した人の割合が９４．５％であった。。ホームページ閲覧の有無が把握出来ないため、更新後に保護者への啓発を行っている。	・今年度は初めてホームページ作成に携わる職員も多かったため年度当初は作成に時間がかかっていたが慣れるにつれて短時間で作成できるようになった。保護者が見やすいように端的にわかりやすい文章を心掛けていく。引き続き、ホームページの充実を図る。 ・引き続き遊びの過程や子どもの学びを様々な方法で保護者に伝える。 ・手紙がデジタル配信になったため、スマートフォンなどの小さな画面でも見やすい手紙を心掛けていく。	・ホームページや園だよりクラスだよりなどで、教育・保育の可視化への工夫がみられる。今後も積極的な発信を続け、家庭と共に教育・保育を進めてほしい。
	市民力を活かした教育・保育の推進	・地域に根ざした園運営を推進する。 ・日々の教育保育の中で、こども園がある神津地区への郷土愛を育む。	・神津小学校やＫメゾンときめき、神津交流センターの児童館や図書館など地域の施設を訪問したり、地域の方を園行事に招いたりして、積極的な交流を図る。 ・教育・保育活動に地域の教育力を積極的に取り入れる。 ・神津地区の特産物に見たり触れたり食したりする機会をもつ。	・業間の交流や給食交流など小学校との交流を年度初めに年間計画を立てて年５回以上行う。 ・Ｋメゾンときめきのデイサービス利用者との交流を学期に２回以上行う。 ・神津交流センターの児童館や図書館を利用する機会を年２回以上持つ。 ・神津ボランティアセンターを活用することで、地域の方々に来園してもらう機会を年３回以上もつ。 ・地域の畑の見学に出かけたり給食で地域の食材を食べたりするなどして地産地消を実際に体験する機会を年１回以上もつ。 ・ひょうたんを育て収穫したり絵付けを体験したりすることで、神津地区の伝統文化に触れる機会をもつ。	B	・給食体験や中学校交流、デイサービスなどは年間計画通りの交流は難しかったが、子ども達が作った物を職員が届けるなど可能な限りの交流はできた。 ・コロナ禍のため、今年度は児童館・図書館に一回のみ来館した。 ・地域の方のご厚意で園が必要としていたタイヤをいただいたり、人形や布おもちゃを作ってただいたりした。コロナ禍で来園していただくことが難しかったため、子ども達が遊んでいる様子を手紙にしてお渡しした。 ・地域の畑の見学やトマトの試食、ひょうたんの栽培及び収穫・絵付けを行い、神津地区の伝統文化に触れる機会を設けるなど、可能な範囲で実施することができた。	・小学校やデイサービスとの交流は、今後も園から積極的にアプローチし実施していく。 ・地域の畑などに出かける機会や地域の方に来園していただく機会、交流センターの施設を利用する機会も今後引き続き設けていく。今後も引き続き社会情勢に合わせた方法で地域の方や施設と子ども達が繋がる機会を設け、地域に根ざした園であり続けられるよう努めたい。	・コロナ禍であったが、出来ることをさぐりながら地域との繋がりを持っていた。今後も地域に根差した園運営を励まれたい。
今日的課題に対応した幼児の教育・保育の推進	子育て支援事業	・職員の子育て支援事業への理解を深め、より一層の充実を図る。 ・家庭教育の推進を図る。	・担当者に限らず、全職員が子育て支援室や園庭を利用する地域の方と関わりを持つ。 ・むっくむっくルームの案内を地域に発信し、利用者を増やす。 ・子育て家庭の不安を取り除き、楽しんで子育てが出来るように園と家庭とで子育てや子ども理解について話し合う機会を設ける。 ・子どもの育ちを支える保護者の子育て力の向上につながるよう、乳幼児期に大事にしていく教育・保育について保護者に伝える機会を設ける。	・全職員が積極的に子育て支援室や園庭に来園している地域の方に声を掛けたり一緒に遊んだりする。 ・むっくむっくルームの利用者が年間平均で月４０組程度になる。 ・ホームページでの発信、「こんにちは赤ちゃん事業」との連携で民生委員の方に地域の出産家庭にチラシを配ってもらう。 ・保護者アンケート、職員アンケートにおいて「こども園はむっくむっくルームを中心として、地域の子育て支援、相談を行っている。」が９５％以上になる。 ・保護者アンケートで「子どものことや子育てのことについて、担任や園の職員に質問や相談をすることができる。」と回答した人の割合が９５％以上になる。 ・子ども理解についての講演会を年に１回設ける。	B	・コロナ禍であり子育て支援室のみを使用してもらう時期が多かったが園内や園庭を利用されている時には積極的に挨拶や声がけをするようにした。 ・むっくむっくルーム利用者は年間平均で月４８組であった。０歳児の利用も多くチラシの有効があった。 ・定期的に案内をホームページで発信しているが行事だけではなく日々の様子を写真やエピソードで伝わるような工夫が必要である。 ・保護者アンケートにおいて「こども園はむっくむっくルームを中心として、地域の子育て支援、相談を行っている。」の回答が８６、５％、「子どものことや子育てのことについて、担任や園の職員に質問や相談をすることができる。」の回答が９１％であった。 ・コロナ禍であり講演会を実施することができなかった。クラスだよりや子どもの写真の読み取りを通して園の教育保育においての「子ども理解」を発信している。	・引き続き、担当者に限らず全職員で地域の方との関わりの機会を大切にする。 ・むっくむっくルームが地域の子育て支援の拠点であると伝わるようホームページを用いて月１回は発信する。 ・懇談会等の機会が十分にもてない中での保護者との連携、共通理解の方法を工夫し、考える必要がある。配布物での伝え方や保護者との信頼関係を深めるための意識的な関わりが必要である。	・今後も地域の子育て支援の場となることを期待する。

学校関係者評価総括

新型コロナウイルス感染防止対策を実施しながら、できる限りの教育・保育進められている。コロナ禍での教育・保育の保障、可視化や保護者への配慮や発信の工夫が伝わったきた。
今後も、園職員と地域や小学校と情報交換を行いながら、子ども達のために幼児教育の質の向上をされることを期待する。

次年度に向けた重点的な改善点

・時代や目の前にいる子どもの姿に応じた、神津ならではの教育・保育課程の編成を進める。
・教育・保育の可視化を継続して行う。
・保護者アンケートを活用し、保護者の声を園運営に反映する。

自己評価の基準　　A：目標を上回った　B：目標どおりに達成できた　C：目標をやや下回った　D：目標を大きく下回った